

【特集 PTSD研究のフロントライン】

わが国における児童期の性的被害の実態とその影響

Mental Health Effects of Child Sexual Victimization in Japan

石井 朝子¹⁾ 飛鳥井 望¹⁾ 小西 聖子²⁾ 稲本 絵里³⁾ 影山 隆之⁴⁾

はじめに

わが国の児童は、どれくらいの頻度で性的被害を受けているのであろうか。

警察庁による犯罪統計によると、わが国における強姦（未遂を含む）の認知件数は、ここ数年、年間1,800件前後で推移している。また強制猥褻の件数は、年間4,000件であり、強姦のほぼ2倍となっている。1998年の統計では、強姦の認知件数は、1,873件、強制猥褻の認知件数は、4,251件であった⁶⁾。表-1に認知件数の年齢別被害者数を示した。

19歳以下の児童に対する被害は、強姦・強姦未遂の4割を占めた。強制猥褻については、その被害全体の6割以上であった。多くの未成年者が性犯罪の被害者となっていることがわかる。

しかし、この数字が児童に対する性的被害の実情を

示しているとは考えにくい。わが国における性的被害の通報率は、他の犯罪に比べて著しく低いと考えられるからである。また家庭内における性的被害は当該家族にさえ知られていないことも多く、通報以前の状態にあると思われる。性的被害の問題は、潜在化しやすく、他人が介入するのが困難である。これは、被害者の家族や周りの者もその事実を知っていても、それを隠蔽してしまう傾向が強いのである⁵⁾。

石川⁷⁾が、1992年に452人の女子大学生におこなった性的被害調査では、高校以前（18歳以前）に受けた性的被害率は、64.8%であり、また「最も不快な・傷ついた性的被害を受けた時期」については、63.8%が「高校以前」と回答している。365名の性的被害者のうち13名（3.5%）がインセスト的虐待経験者（親族・従兄弟からの性的被害）であった。小西¹⁰⁾によると、430人の大学生（男性：83名、女性：342名）における「中学以前」の性的被害率は、男性が0%に対して女性は17.2%であった。また「子どもと家族の心と健康」調査委員会が、全国7,000人（男性2,000、女性5,000）の18歳から39歳を対象に実施した調査報告によると、18歳以前に身体的接触による性的虐待は、52.8%であった⁹⁾。

一方米国では、Finkelhor¹¹⁾による疫学的調査では、女子大生の19%が児童期（17歳以下）に成人との性的接触を経験していると報告されており、成人女性の10~30%が児童期に性的虐待にさらされているとしている。またRussell¹²⁾がカリフォルニア州在住の18歳以上の930名の女性に行った性的虐待調査の結果では、18

¹⁾ 東京都精神医学総合研究所、ストレス障害研究部門
Division of Psychiatric Disorders Research, The Department of
Stress Disorders Research, Tokyo Institute of Psychiatry,
〒156-8585 東京都世田谷区上北沢2-1-8

2-1-8, Kamikitazawa, Setagaya-ku, Tokyo, 156-8585, Japan

²⁾ 武蔵野女子大学 人間関係学部

Department of Human Studies, Musashino Women's University

³⁾ 上智大学大学院 文学研究科

Graduate Division of Humanities, Sophia University

⁴⁾ 大分県立看護大学 精神看護学

Oita University of Nursing and Health Sciences

(別刷請求先：石井朝子)

〒156-8585

東京都世田谷区上北沢2-1-8

表-1 年齢別被害者数

	19歳以下	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳以上	被害者総数
強姦	839	744	148	79	42	21	1,873人
強制猥褻	2,798	1,147	189	78	23	16	4,251人

(平成11年版 警察庁犯罪統計⁶⁾より作成)

歳以前に虐待を受けた者は、38%、14歳以前に虐待を受けた者は、28%、父親・継父に虐待された者は、4.5%と報告している。

以上のことから、日米における児童期の性的暴力の被害に差異は見られず、わが国における児童期の性的被害は、司法当局が報告している件数を上回り、米国の被害率に近い可能性もあると考えられる。また日本における児童期の性的被害の暗数が多く存在していると思われるが、その実態がどのようなものなのかを示す資料は少ない。

本研究の目的は、これまでほとんど調査されたことがなかった疫学的な児童期の性的被害の実態 1) 疫学的な性的被害経験率、2) 被害者と加害者の関係、3) 被害を受けた回数、4) 被害を受けた場所、5) 被害を受けた後の警察への通報率、6) 被害を受けた後の身体的、心理的影響を明らかにすることである。

対象と方法

1) 対象

本研究の対象は東京都の東部、中部、西部にある3地域に在住する一般成人女性である。住民台帳に基づき20歳代から50歳代の10歳階級ごとに各200人を層化無作為抽出し、これら2,400人に無記名式質問紙を郵送した。調査期間は、1998年9月から12月である。

2) 回収率

対象者2,400名のうち、459名(19.1%)から有効回答を得た。

回答者の年代、就業状況(家事やボランティアは除き、週3日以上働いている場合を就業中とした)、婚姻状況を表-2に示した。

表-2 基本的属性の概要

	%
総数	459
年齢区分	
20-29	21.8
30-39	26.4
40-49	25.9
50-59	25.7
就労状況	
就業中	59.7
無職	40.3
婚姻状況	
未婚*	27.5
既婚	67.5
離婚	4.8

* 死別、別居を含む

3) 調査票

性暴力被害に関する質問、Impact of Events Scale-Revised (IES-R)¹³⁾、General Health Questionnaire-12 (GHQ-12)³⁾を含む無記名・自記式質問調査票を作成した。調査票は、5部からなる。内訳は、1) 人口統計学的項目(年齢、就業状況、婚姻状況)、2) 被害状況(言葉で性的ないやがらせを受けた、性器をわざと見せられた、無理やり体をさわられた、無理やり抱きつかれた、無理やりキスされた、無理やり性器をさわられた、したくないのに性交されそうになった、したくないのに性交された)、3) 精神健康の状態(日

本版GHQ-12)、4) 心的外傷後のストレスの状態(日本版IES-R)、5) ストレスフルライフイベントである。

結果

本論文では、性的被害経験率と児童期・成人期の性的被害によるトラウマ症状について述べる。また本調査では、児童期を「19歳以下」と定義した。

1) 性的被害経験率

有効回答者総数459名のうち、児童期において、8種類の被害状況のいずれかの被害を受けたことがある

と答えた者は、255名(55.6%)であり、児童期の被害は、少なくなかった。各被害を表-3に示した。被害状況別では、「性器の露出」が28%、それから「無理やり体をさわられた」が30%と高い値を示している。このあたりは、公園やデパートの玩具売り場などでの痴漢の経験が記述されているものが多い。また「無理やり性器をさわられた」という重い被害も15%とかなりの率で述べられている。

2) IES-Rにみる児童期と成人期の性的被害

本調査ではIES-Rの得点の平均値は、15.3 (SD=15.7)であった(表-4)。

これまでに8種類の被害状況のいずれかの被害を受けたことがあると答えた「被害有り」群とし、そのIES-Rの平均得点は、15.9 (SD=15.7)であった。また8種類の被害状況いづれの被害もこれまでに受けたことがないと答えた「被害無し」群とし、その平均得点

は、10.8 (SD=14.8)であった。Mann-Whitney-U検定を実施したところ、「被害有り」群と「被害無し」群において有意差 (P=0.004) が認められた(表-4)。

459名の有効回答者の被害時期(児童期に「もっとも傷ついた被害経験」を持ち、「自分の性的被害について」回答した者を「児童期」群とし、成人期に「もっとも傷ついた被害経験」を持ち、「自分の性的被害について」回答した者を「成人期」群とした)を各時期で分けた。「PTSDハイリスク」群を判断するためのAsukai²⁾によるカットオフ・ポイントとして24/25(低得点群/高得点群)を使用して分類した(表-5)。

被害時期においてIES-Rの得点に影響があるかどうかを調べるため χ^2 乗検定を行った。有意な差は、見られなかった。

米国の先行研究では「性的被害において、知人によ

表-3 被害経験率

	19歳以下	20-59歳
	%	%
言葉での性的嫌がらせ	9.4	26.8
性器を見せられた	27.5	26.8
無理やり体をさわられた	29.6	37.5
無理やり抱きつかれた	10.5	17.6
無理やりキスをされた	6.3	10.9
無理やり性器をさわられた	14.6	6.8
性交されそうになった	4.6	9.4
性交された	1.7	5.9

表-4 IES-R 平均得点

	平均得点 (SD)	検定
全体	15.3 (15.7)	
被害有り群	15.9 (15.9)	Mann-Whitney U-test p<0.01
被害無し群	10.8 (14.8)	

表-5 PTSDハイリスク群 (IES-R \geq 25) の割合

	%	検定
全体	20.7	
被害時期		χ^2 -test, n.s.
児童期 a	28.2	
成人期 b	28.7	

note: a) 児童期に「もっとも傷ついた被害経験」を持ち、「自分の性的被害について」回答した者
b) 成人期に「もっとも傷ついた被害経験」を持ち、「自分の性的被害について」回答した者

る強姦などの重い被害は、トラウマを受けやすい」と報告されている¹⁾¹²⁾。本調査では、知人からの「1回以上の重い被害」群をそれぞれ抽出し、被害時期でその様相に相違があるかどうかを考察した。

「児童期に性器をさわられた、性交されそうになった、性交されたなどの重い被害を知人から1回以上受けた」群を「児童期の知人からの被害」群とした。こ

の群のIES-Rの平均得点は、29.9 (SD=16.1) であった。

また児童期同様、「成人期に性器をさわられた、性交されそうになった、性交されたなどの重い被害を知人から1回以上受けた」群を「成人期の知人からの被害」群とした。この群のIES-Rの平均得点は、26.6 (SD=17.4) であった。各群の被害の実態を表-6に示した。

表-6 児童期と成人期の知人による重い性的被害状況

	児童期 (n=21)		成人期 (n=22)	
		%		%
年代				
	20代	19.0		31.8
	30代	23.8		22.7
	40代	23.8		27.2
	50代	33.3		18.2
被害の種類				
	無理やり性器をさわられた	61.9		4.5
	性交されそうになった	23.8		45.5
	性交された	14.3		50.0
被害時期				
	就学前	23.8		—
	小学生	47.6		—
	中学生	14.3		—
	中卒~19歳	14.3		—
	20代	—		72.7
	30代	—		18.2
	40代	—		9.1
加害者				
	家族・親戚	38.0		—
	教師	14.3		—
	上司	—		18.2
	友人	9.5		22.7
	同僚	—		9.1
	知人	19.0		22.7
	夫・前夫	—		22.7
	その他	19.0		4.5
通報				
	有り	—		9.1
	無し	100.0		90.9
IES-R平均点 (SD)		29.9 (16.1)	26.6 (17.4)	

考 察

本調査において、有効回答者459名の55.6%が児童

期の性的被害を受けていることがわかった。「児童期に性器をさわられた、性交されそうになった、性交されたなどの重い被害を知人から1回以上受けた」と回答した、21人全員が警察への通報はしていない。この

ことから児童期の性的被害が「密室」で行われており社会の目になかなかさらされにくいことが伺える。

児童期に知人から受けた重い被害として、6割以上が「性器をさわられる」被害を受けていた。またその被害の加害者をみると、4割近くが、家族や親戚から性器をさわられた、性交されそうになった、性交されたなどの重い被害を受けていた。これらの被害は、「児童性的虐待」であると考えられる。また密室で行われる誰にも言えない、逃げられない性的被害である。

厚生労働省で定義している児童虐待のうちの「性的虐待」は、「親による近親姦、または、親にかわる養育者による性的暴行」である⁹⁾。本調査では、「児童期の性的被害」としてあげられたケースは、親以外には、家族や親戚などによる性的被害が多くあげられた。厚生労働省の報告している「児童性的虐待」の実際のケースは、加害者は「実父」や「兄弟」である。本調査では対象者に過去にあった被害を聞いているため、記憶があいまいであったり、すべての被害を書けていなかったり、また虚嘘を記述している可能性は否定できない。しかし「親」や「養育者」以外の「親戚」からの性的被害が意外に多いことがわかった。このことを考えると厚生労働省が報告している性的虐待の件数は、児童性的虐待の氷山の一角に過ぎず、暗数はかなりあると推測できる。

一方成人期に「性器をさわられた、性交されそうになった、性交されたなどの重い被害を知人から1回以上受けた」群についてみると、加害者に「夫・前夫」または「パートナー」が多くあげられていた。これらは、「婚姻間レイプ (Marital Rape)」や「デートレイプ (Date Rape)」の被害者であると推測される。

これまで「被害に関する質問において、児童期の性的被害をあげた人は、児童期の被害を報告していない人及びこれまで被害がなかったとしている人に比べて現在の精神健康度が低い。」と考えていた。しかし本調査では、性的被害を児童期に受けた場合と成人期に受けた場合を比較すると現在のトラウマ症状は、児童期に被害を受けた場合でも、成人期に受けた場合でも違いはなかった。しかし、過去に性的被害を受けた場合と一度も性的被害を受けたことがない場合では、現在のトラウマ症状に相違があった。

本調査ではトラウマの影響を測る尺度として、IES-Rを使用した。IES-Rは、過去の被害による現在のトラウマ症状を測定するものである。本調査では、過去の被害による現在の精神健康度への影響をある程度反

映していると考えられた。

本研究は、完全な自記式調査であったことから、調査側からの性的被害の定義について説明できないため、回答者にその判断をゆだねたことから、それぞれの性的被害についての認知の相違が反映されていると考えられる。また米国の調査と比較すると、回収率が低かった。これにはいくつかの原因があると考えられる。まず第一に、日本において性的なことを質問されることに不慣れである、第二に、突然郵送により質問紙が送られてきたことなどに困惑したため、回収率が低くなったと考えられる。しかし、わが国における質問紙を郵送回収する調査においては、およそ20%前後が一般的回収率といわれている。

終わりに

回答者の55%が児童期に何らかの性的被害を経験していた。児童期の被害は、頻度も高く、犯罪性の高い被害も少なくなかった。性的被害は、被害者にとって苦痛な記憶として長期間保持されている。

今後も信頼性の高い調査を繰り返し行うことで、わが国の児童性的被害に関する包括的な情報が得られ、その知見をもとに被害者への実効性ある援助や予防につながることが望まれる。

文献

- 1) Amy E. Wilson, Karen S. Calhoun & Jeffrey A. Bernat (1999). Risk Recognition and Trauma-Related Symptoms Among Sexually Revictimized Women. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 67(5); 705-710.
- 2) Asukai, N., Kato, H., Kawamura, N., Kim, Y., Yamamoto, K., Kishimoto, J., Miyake, Y., & Aya Nishizono-Maher (2002). A. Reliability and validity of the Japanese-language version of the Impact of Events Scale-Revised (IES-R-J): Four studies on different traumatic events. *The Nervous and Mental Disease* (190)3,175-182.
- 3) Goldberg, D.(1972). *The Detection of Psychiatric Illness by Questionnaire*. Oxford University Press : London.

- 4) Finkelhor, D. (1979). *Sexually victimized children*. New York : Free Press . 究報告書. 財団法人社会安全研究財団助成研究事業報告書.
- 5) 厚生省労働本省業務報告：児童相談所における児童虐待等の状況報告書 (2000) . 11) Russell, D. E. H. (1984). *Sexual exploitation : rape, child sexual abuse, and workplace harassment*. Beverly Hills, CA : Sage Publications.
- 6) 犯罪白書 (1999) : 法務省 法務総合研究所 12) Lana E. Stermac, Janice A. Mont & Valery Kalemba (1995). *Comparison of Sexual Assaults by Strangers and Known Assailants in an Urban Population of Women*. *Journal of Canadian Medical Association* 153 (8), 1089-1188.
- 7) 石川義之 (1995) ; 現代日本における児童虐待の実状 I, II. 島根大学法文学部紀要.. 13) Weiss, D.S. & Marmar, C.R. (1997). *The Impact of Event Scale-Revised*. In : Wilson, J.P. & Keane, T.M. ed. *Assessing Psychological Trauma and PTSD*. The Guilford Press, New York, pp 399-411.
- 8) 加納尚美、中村安秀、桜山豊夫 (2000). 医療機関における性暴力・暴力被害女の受け入れに関する実態調査. *日本公衛誌* (47), 394-402.
- 9) 「子どもと家族の心と健康」調査委員会／日本性科学情報センター (1999) . 「子どもと家族の心と健康」調査報告書.
- 10) 性暴力被害少年対策研究会 (小西聖子) (1997) ; 児童期の性被害とその影響に関する研